

パーリ上座部における四大教法の理解

——「法と律」「経と律」「世尊の言葉」の意味を巡って——

清水 俊 史

【抄録】

四大教法は、仏滅後に新たに提示された教説が「世尊の言葉」（仏説）として認められるか否かを決定する理論として知られる。上座部註釈文献を対象とした従来の諸研究では、この四大教法は「上座部三蔵に含まれる典籍の正統性・権威性を保証し、他教団の典籍の混入を防止する役割がある」とされ、ここに説かれる「世尊の言葉」「法と律」「経と律」という用語も「三蔵」を意味すると理解されてきた。本稿は、この従來說を再検討することで、上座部における四大教法は、新たに提示された教説が正しい仏教理解に基づいた「解脱に資する教え」であるか否かを判別するための理論であることを指摘する。

キーワード：上座部註釈文献、ブッダゴーサ、ダンマパーラ、仏説論

問題の所在

本稿は、ブッダゴーサ（五世紀）によって著された上座部註釈文献を主な研究対象として、そこに説かれる四大教法（cattāro mahāpadesā）の理解を検討する。四大教法とは、DN. 16「大般涅槃經」において、仏陀が入滅する前に弟子たちに残した教えの一つである。具体的には、「世尊や長老から“法と律”を聞いた」と主張する比丘が現れたとしても、それを鵜呑みにせず、必ず「経と律（と法性）」という二種（あるいは三種）の判定基準に照らし合わせ、もしそれらに適っていればその主張は「世尊の言葉」（仏説）として認められる、というものである。このような四大教法は、1）「何が“世尊の言葉”なのか」を決定する理論という点からは、仏滅後に起こった部派分裂史や⁽¹⁾、その各部派が自己の聖典を如何にして正統化させているかを解明する手掛かりとして⁽²⁾、2）そして新たな“仏説”を生み出すことが可能な理論という点からは、聖典形成史や大乘仏教起源論に光を当てるものとして高い注目を浴びてきた⁽³⁾。

たとえば、四大教法における仏説の判定基準として「経と律」の他に「法性」を認める有部は「たとえ経蔵などに見られない新説であっても、法性に叶いさえすれば仏説である」という理論を有しており、この理論が大乘仏説論にも転用されていることが明らかになっている。他方、有部などと異なり上座部では、「法性」を除いた「経と律」の二つだけが仏説の判定基準

として認められるため⁽⁴⁾、それは「新たな仏説を生み出す理論」としてではなく、「上座部三蔵内容やその範囲を規定し、他部派の典籍の混入を防止するための理論」として理解されることが一般的である⁽⁵⁾。近年の研究においても An, Yang-Gyu [2002: p. 56.2-19] は、結集によって収載された「法と律」のみを三蔵として権威付ける理論として四大教法を理解している。青野道彦 [2007: p. 55.2-16] は、ダンマパーラによる四大教法が聖典解釈の是非を決定する理論であるとしてこの定説に異を唱えながらも、やはりブッダゴーサにおける四大教法は「世尊の言葉」を三蔵に限ろうとするものと結論している。馬場紀寿 [2008: pp. 211.3-215.5] は、ブッダゴーサが「全ての仏陀の言葉＝一味＝法と律＝初・中・後＝三蔵＝五部＝九分教＝八万四千法蘊」という等式のもとに三蔵の範囲を排他的に設定したことに関連して、四大教法と上座部三蔵を結び付けて理解している。

しかし、これらの諸研究には大きな問題が見られる。An, Yang-Gyu [2002]；青野道彦 [2007]；馬場紀寿 [2008] は、四大教法における「法と律」「経と律」「世尊の言葉」といった用語が「三蔵」を意味していると理解しているが、ブッダゴーサ註においてこの関係が明示されているわけではない。これらの用語は様々な意味を持ち合わせており、必ずしも「三蔵」だけを意味するものではない。よって、これらの用語の具体的な意味については、より多くの文献を考察の材料としながら、かつ其々の文献の内容に応じて慎重に検討する必要がある。

これを受けて本稿は、これらの先行研究の成果を礎としながらもそれを批判的に再検討することで、上座部における四大教法とは、三蔵の内容や範囲を規定するための理論ではなく、新たに提示された教説が正しい仏教理解に基づいているか否かを判別するための理論である点を指摘する。

第1節 予備的考察

問題の所在において述べたように、上座部における四大教法は三蔵の内容や範囲を規定する理論として理解されてきた。しかし片山一良 [1989]；山極伸之・佐々木閑 [1997]；青野道彦 [2005b] などの研究によって上座部註釈文献の解説が進むにつれて、1) DN. 16経に説かれるものとは別に Vin. においても四大教法が説かれていると上座部は理解していること、2) そしてこの Vin. に説かれる四大教法は三蔵や仏説論と直接関係しないことが明らかになってきている。

それゆえに上座部の四大教法理解を解明するためには、DN. 16経に説かれる四大教法を検討するだけでは不十分である。そこで本節では、具体的な考察に入るための予備的考察として、先行研究による成果に基づきながら、上座部における四大教法の構造を俯瞰する。

第1項 二種の四大教法

まず本項では上座部における二種類の四大教法について概観する。DN. 16「大般涅槃經」には、本稿の考察の原点となる四大教法が次のように説かれている。

DN. 16 (Vol. II p. 124.3-19)：比丘らよ、ここに比丘が次のように語ったとします。「友よ、私は世尊から“これが法である、これが律である、これが師の教えである”と直接聞き、直接受けました」と。比丘らよ、その比丘の説いたことは、喜ばれるべきでもなく、非難されるべきでもありません。喜びもせず、非難もせず、それらの語句をよく受け取り、經に引き合わせて、律に照らし合わせるべきです。もし、それらが經に引き合わされ、律に照らし合わされて、經に合致せず、律に一致しないのであれば、ここで結論が得られるべきです。“確かにこれは、かの世尊の言葉ではなく、この比丘が誤って受け取ったものである”と。この場合には、比丘らよ、これを棄てなければなりません。もし、それらが經に引き合わされ、律に照らし合わされて、經に合致し、律に一致するならば、ここで結論が得られるべきです。“確かにこれは、かの世尊の言葉であり、この比丘が正しく受け取ったものである”と。比丘らよ、この第一の四大教法を保持しなければなりません。

すなわち、新たに「これが法である、これが律である、これが師の教えである」と主張する比丘が現れた場合、それが「世尊の言葉」に適うか否かを判別するために「經と律」と照らし合わせなければならない。上記の場合には、この比丘の主張する情報源が「世尊」であることから「世尊の四大教法」と呼ばれる。DN. 16經では、これに続いて「僧団」「多くの長老」「一人の長老」という三種の情報源の場合が説かれ、これらを併せて「四大教法」とされる。

一般的に「四大教法」と言われる場合には、上記 DN. 16經に説かれているものを指す。しかしブッダゴーサやダンマパーラの著した註釈文献によれば、DN. 16經に説かれるこれは「經に属する四大教法」であり、それとは別に「律に属する四大教法」と呼ばれるものが Vin. において説かれていると上座部は理解している⁽⁶⁾。その「律に属する四大教法」とは次の箇所である。

Vin. (Vol. I pp. 250.34-251.6)：(1) 比丘らよ、私によって「これは適法ではない」と禁止されていなくても、それが不適法に随順し、適法に反するならば、それはあなた達にとって適法ではありません。(2) 比丘らよ、私によって「これは適法ではない」と禁止されていなくても、それが適法に随順し、不適法に反するならば、それはあなた達にとって適法です。(3) 比丘らよ、私によって「これは適法である」と許されていなくても、それが不適法に随順し、適法に反するならば、それはあなた達にとって適法ではありません。(4) 比丘らよ、私によって「これは適法である」と許されていなくても、それが適

法に随順し、不適法に反するならば、それはあなた達にとって適法です。

この一文は、律に記されていない事態が生じた場合に、どのようにそれを処理すればよいのか、という律の拡大解釈と密接に関係している。すなわち、世尊によって「適法ではない」と禁止されていなくとも、いわば律の精神に適わないと判断されればそれは不適法とされ、逆に「適法である」と許されていなくとも、律の精神に適えばそれは適法とされる。

さて、DN. 16経に説かれる「経に属する四大教法」と、Vin. に説かれる「律に属する四大教法」を比較すると、両者に共通する点は、「法と律」あるいは「適法・不適法」の決択が、仏陀自身ではなく、仏弟子たちによって下し得ることが認められていることである。さらに別の註釈によれば、「経に属する四大教法」は経蔵と阿毘達磨蔵を対象に用いられ、「律に属する四大教法」は律蔵を対象に用いられるという⁽⁷⁾。すなわち、仏滅後に提示された教理的な「法と律」の妥当性を決択させるために「経に属する四大教法」が用いられ、同じく仏滅後に起こった僧団規則の解釈を巡る事案が「適法」であるか「不適法」であるかを決択させるために「律に属する四大教法」が用いられるということである⁽⁸⁾。

第2項 四大教法の三蔵と関係

前項において、上座部では二種の四大教法を想定している点を指摘した。続いて本項では、「経に属する四大教法」によって是認された「法と律」や、「律に属する四大教法」によって是認された「適法」が、どのように三蔵と関係するのかを考察する。

このうち、「律に属する四大教法」は三蔵を規定する理論ではないことが、片山一良、山極伸之、佐々木閑、青野道彦らの研究によって明らかとなっている⁽⁹⁾。この根拠は、上座部が教説を権威順に「経（＝律蔵）」「経随順（＝律蔵に準拠している教説）」「師の説」「自らの意見」と四種に並べるうち、律の四大教法によって導かれるものは「経随順」だからである。したがって、「律に属する四大教法」は、律蔵を巡る解釈の妥当性を検証する理論であって、ある解釈が「適法」とであると判断されたからといって、それが律蔵のうちに新たに書き加えられるわけではない。

一方、「経に属する四大教法」については、DN. 16経にある「新たに提示された「法と律」が是であると判断されれば、それは「世尊の言葉」として認められる」という記述から、この「法と律」（すなわち「世尊の言葉」）は仏説たる三蔵に他ならない、と多くの先行研究において理解されてきた。確かに DN. 16経に説かれた四大教法の字義をそのままに受け取れば、そのように解釈することも可能であろう。しかし、ブッダゴーサなど註釈家達が四大教法をそのように理解していたかどうかは別の問題である。経典の字義を後代の上座部教理にそのまま書きすることは出来ない。この問題を考察する上で、青野道彦による一連の研究は示唆的である⁽¹⁰⁾。そのなかで青野道彦〔2007：p. 55.1-16〕は、DN. 16「大般涅槃經」の四大教法によっ

て導き出される「世尊の言葉」について、両註釈家がどのように理解したのかを次のように結論している。

ブッダゴーサ：擬似的な経文を非仏説として排除し、「三蔵」のみを「世尊の言葉」として位置付けようと試みている。

ダンマパーラ：「世尊の言葉」を、《聖典の意味を解釈し、sutta（＝四諦）及び、vinaya（＝煩惱の除去法）との照合作業を経て、妥当性が認められた解釈の言葉》として理解している。

すなわちブッダゴーサとダンマパーラの間に思想的差異を認め、「経に属する四大教法」はブッダゴーサにとって三蔵を規定する理論であっても、ダンマパーラにとっては聖典解釈の是非を決定する理論であったというのである。この青野道彦による主張のうち、ダンマパーラの理解については極めて妥当であると考えられる⁽¹¹⁾。なぜならダンマパーラが著した復註(DNT.)において、「経に属する四大教法」によって導き出されるものは「三蔵」ではなく「三蔵に準拠している教説」であると明確に説かれているからである⁽¹²⁾。

ここで問題となるのは、このダンマパーラの理解が、ブッダゴーサの理解にまで上書きできるかどうかである。先ほど述べた青野道彦[2007]は、この上書きを認めず、ブッダゴーサ註(DNA.)における「経に属する四大教法」は「三蔵」を規定するものであると理解している。ところがこの上書きが認められるか否かの検証作業は、事実上、DNA. 16「大般涅槃経註」の部分的な記述だけに基づいており十分とは言えない。

したがってこの点を再検討することが四大教法研究の課題であり、本稿の目的は、この検討を通して、ブッダゴーサも「経に属する四大教法」を「経随順」として、すなわち「三蔵に準拠している教説」を導き出す手立てとして理解していたと結論付けることにある。

第2節 「経に属する四大教法」と三蔵の関係

第1節において、上座部における四大教法の構造を概観した。上座部では四大教法を「経に属する四大教法」と「律に属する四大教法」の二つに分類し、そのうちの「律に属する四大教法」は「三蔵」を規定する理論ではないことが明らかになっている。一方の「経に属する四大教法」については、それが「三蔵」の内容や範囲を規定する理論であることが謂わば定説化している。この定説に疑義を挟み、ダンマパーラにおける「経に属する四大教法」は「三蔵に準拠している教説」を導く手立てであると主張した青野道彦も、やはりブッダゴーサについてはそれが「三蔵」を規定するための理論であると理解している。

しかしながら、ブッダゴーサによって著された文献のうちに、「経に属する四大教法」によ

って導き出されるものが「三蔵」であると積極的に示す根拠は存在しない。むしろ、それは「三蔵に準拠している教説」を導くための理論であると理解しうる記述が散見される。そこで本節では、それら記述を通してブッダゴーサにおける四大教法理解を探る。

第1項 VinA. おける四大教法理解

まず、Vin. とその註釈 VinA. に説かれる記述から検討する⁽¹³⁾。先の第1節2項において、教説を権威順に「経」「経随順」「師の説」「自らの意見」と並べたうち、「律蔵」は「経」に、「律に属する四大教法」は「経随順」に含まれることを示した。これは「律に属する四大教法」が「律蔵」ではなく「律蔵に準拠している教説」を導き出す手立てであることを意味している。これと類似する記述が次の箇所から回収される。まず、Vin. において次のように説かれる。

Vin. (Vol. V pp. 186.27-187.2)⁽¹⁴⁾：ウパーリよ、他の五支を具えた比丘も僧団において言説してはなりません。如何なる五つでしょうか。(1) 経を知らず、(2) 経随順を知らず、(3) 律を知らず、(4) 律随順を知らず、(5) 処・非処に巧みでない、ウパーリよ、実にこの五支を具えた比丘は僧団において言説してはなりません。ウパーリよ、五支を具えた比丘は僧団において言説すべきです。如何なる五つでしょうか。(1) 経を知り、(2) 経随順を知り、(3) 律を知り、(4) 律随順を知り、(5) 処・非処に巧みである、ウパーリよ、実にこの五支を具えた僧団において比丘は言説すべきです。ウパーリよ、他の五支を具えた比丘も僧団において言説してはなりません。如何なる五つでしょうか。(1) 法を知らず、(2) 法随順を知らず、(3) 律を知らず、(4) 律随順を知らず、(5) 前・後に巧みでない、ウパーリよ、実にこの五支を具えた比丘は僧団において言説してはなりません。ウパーリよ、五支を具えた比丘は僧団において言説すべきです。如何なる五つでしょうか。(1) 法を知り、(2) 法随順を知り、(3) 律を知り、(4) 律随順を知り、(5) 前・後に巧みである、ウパーリよ、実にこの五支を具えた僧団において言説すべきです。

これは羯磨において反論弁舌 (vipaccatāya vohāra) をするのに相応しい人物について説いている箇所である。ここでは前半部において「法」「法随順」「律」「律随順」が、後半部において「経」「経随順」「律」「律随順」が説かれる。これらが何を意味するかについて、VinA. は次のように説明する。

VinA. (Vol. VII p. 1374.9-21)：「経を知らず」とは、「両分別を知らず」である。「経随順を知らず」とは、「四大教法を知らずに」である。「律を知らず」とは、「犍度・附随を知らず」である。「律随順を知らず」とは、「まさに四大教法を知らずに」である。…中略

…。「法を知らず」とは、「律蔵を除く他の二蔵を知らず」である。「法随順を知らず」とは、「経に属する四大教法を知らずに」である。「律を知らず」とは、「まさに犍度部・附随を知らずに」である。「律随順を知らず」とは、「四大教法を知らずに」である。ところで、ここには両分別が含まれていないので、『クルンディー』⁽¹⁵⁾では「律とは、“律蔵全体を知らずに”である」と説かれるが、これを受け取ってはならない。

以上に説かれている内容を表に纏めれば次のようになる。

		内 容
【前半部】 経と律	経	両分別
	経随順	四大教法
	律	犍度・附随
	律随順	四大教法
【後半部】 法と律	法	経蔵・阿毘達磨蔵
	法随順	経に属する四大教法
	律	犍度・附随
	律随順	四大教法

すなわち「経」や「律」を「三蔵」の一部として、「経随順」や「律随順」を「四大教法」として位置付けている。ここで最も注目すべきは後半部であり、そこでは「法＝経蔵・阿毘達磨蔵」と「法随順＝経に属する四大教法」という関係性が確認される。すなわち、ここでの「経に属する四大教法」は、「経蔵・阿毘達磨蔵」ではなく、「経蔵・阿毘達磨蔵に準拠している教説」を導き出す理論であると理解しなければならない⁽¹⁶⁾。

第2項 MNA. 104「サーマガーマ経註」における四大教法理解

続いて、MN. 104「サーマガーマ経」に対する註釈を検討して、上座部における四大教法の具体的な適用例を考察する。このMN. 104経の冒頭部では、ジャイナ教の開祖ニガンタ・ナータプッタが亡くなった後に、その教団が「法と律」の解釈を巡り分裂してしまったことが説かれる。この状況を観察していたチュンダ沙弥が、「仏陀なき後の仏教教団も分裂してしまうのではないか」という危惧をアーナンダに伝えると、アーナンダはこれを仏陀に問うべきであると答えて、チュンダを連れてこの危惧を仏陀に具申する。これに対して仏陀は、仏滅後の教団では生活にかかわる争論と、教法にかかわる争論の起こる可能性がある述べ、これに続いて様々な争論の原因とその解決方法を説明する。このように、MN. 104経は仏滅後に起こるであろう争論を題材としているが、経典の段階では四大教法には言及していない。ところがブッダゴーサによる註釈（MNA.）では、本経が四大教法と密接に関係付けられており、仏滅後に争

論が起きぬように四大教法を仏陀が説いたと説明される⁽¹⁷⁾。特に四大教法と関係するものは、争論を解決する手段の一つ「現前ヴィナヤ」である。まず、MN. 104経には次のように説かれている。

MN. 104 (Vol. II p. 247.10-18) : そしてアーナンダよ、「現前ヴィナヤ」とは何であろうか。アーナンダよ、ここに比丘たちが「法である」とか「非法である」とか、あるいは「律である」とか「非律である」などと争論します。アーナンダよ、そこですべての比丘たちが和合し、集合しなければなりません。集合して、法の指針が定められるべきです。法の指針を定めてから、それに一致するように、その諍事を鎮めるべきです。アーナンダよ、このようにして「現前ヴィナヤ」があります。そして、このようにして、すなわち「現前ヴィナヤ」によって、ここで一部の諍事の鎮静があります。

ここでは、「法である」「非法である」「律である」「非律である」という議論が起こった場合には、比丘たちが集まって解決しなければならないと説かれている。よって註釈家が述べているように、本経(MN. 104経)で起こっている争論は、まさに四大教法(すなわち DN. 16経に説かれる「経に属する四大教法」)によって判定されるべき事案である。したがって、本経(MN. 104経)における「法」や「律」に対する註釈家の解釈を検討することは、「経に属する四大教法」の理解を深める上で大きな一助となる。この箇所についてブッダゴーサとダンマパーラは次のように註釈している⁽¹⁸⁾。

MNA. 104 (Vol. IV pp. 46.26-47.23) : 【「法」判別】 そのうち「法」云々について、経の異門によれば、まず十善業道が法であり、十不善業道が非法である。同様に、「四念処」といった既に説かれた三十七菩提分法は〔法〕である。三念処、三正勤、三神足、六根、六力、八覺支、九支道や、また四取著、五蓋などの染汚法という、これが非法である。そのうち、何か一つでも非法の部分をつまえて「我々はこの非法を法にしよう。このようにすれば、我々の師家は出離を齎すものになるだろう。そして、我々も世間に知られるようになるだろう」と〔考えて〕、その非法を「これは法である」と語りつつ、「法である」と争論する。まったく同様に、法の部分のうち一つをつまえて「これは非法である」と語りつつ、「非法である」と争論する。…中略…。【「律」判別】 また、経の異門によれば、貪の調伏、瞋の調伏、痴の調伏、律儀、捨断、簡択というこれが律と呼ばれる。貪などの不調伏、不律儀、不捨断、不簡択というこれが非律と呼ばれる。

MNT. 104 (VRI: Vol. IV p. 31.8-15) : 【「法」判別】 菩提分法は一向に無過なるものであるから、非法であることはない。世尊から説示された行相を損耗させたり、肥大させたり

して語ることは法の通りになされたのではない故に「非法なものである」と示して「三念処」云々と説いたのである。「出離を齋すもの」とは、有神変で無障礙のものにして転じている。「まったく同様に」とは、「このようにすれば、我々の」云々と説かれた意味を引いている。…中略…。【「律」判別】「これが律と呼ばれる」とは、貪などを防ぎ、捨断し、簡択するからである。「これが非律と呼ばれる」とは、貪などを調伏しないからである。「これが律と呼ばれる」とは、調伏の通りに為すからである。〔この〕説かれたことと反対の、他なるものが「非律」である。

なお、これと同じ適用例が VinA. (Vol. VI p. 1278.2-30) や ANA. i, 10, 33 (Vol. I p. 85.9-86.4) においても説かれることから、このような四大教法の利用法は上座部における標準であったと考えられる。以上の内容を表にまとめれば次のようになる。

	判別される「法・非法」「律・非律」の内容
法	十善業道、四念処、三十七菩提分法
非法	十不善業道や四取著などの染汚法、三念処などの不正確な教え
律	貪などを調伏し、防ぎ、捨断し、簡択するもの
非律	貪などを調伏せず、防がず、捨断せず、簡択しないもの

よって、「経に属する四大教法」によって判別される「法」については、三蔵に説かれる十善業道や三十七菩提分法などの善法だけが「法」であり、十不善業道や四取著、五蓋などの染汚法は、たとえ三蔵に説かれていても「非法」とであると判別される。また善法であっても、四念処を三念処と語ったり、七覚支を八覚支と語ったりすることは、仏陀の教えを正確に伝えていないという点で「非法」とであると判決される。従ってこの場合の「法」とは、三蔵に残された教説のうち解脱に資するものだけを指している。

そして、「経に属する四大教法」によって判別される「律」については、ある教説が貪などを調伏するものであれば、それは「律」として認められる。この点において判定基準である「律」と、その結果導かれる「律」は同一のものである。すなわち「律」は解脱に資するものであればそれでよいのであって、三蔵の教説と一言一句対応している必要性は要求されていない。

このようにブッダゴーサとダンマパーラのいずれも、仏滅後に沸き起こった教説の是非を決断させるために「経に属する四大教法」を適用すると理解しているが、ある教説が「法である」「律である」と容認されたとしても、それが三蔵の範囲内に必ず収まるわけではなく、ましてや新たに三蔵として加えられるわけでもない。あくまで「経に属する四大教法」は「三蔵（厳密に言えば経蔵と阿毘達磨蔵）に準拠している教説」を導き出す手立てであり、ここでの「法と律」は端的に言えば「解脱に資する教え」という意味で用いられている。

第3節 DNA. 16「大般涅槃經註」における四大經法

前節ではブッダゴーサ著作に説かれる「經に属する四大教法」の検討を通して、それが「三藏」を規定する理論ではなく、「三藏に準拠した教説」を導き出す理論である点を指摘した。この指摘は、これまでの研究成果を覆すものである。先行研究においては、DN. 16「大般涅槃經」に説かれる四大教法（すなわち「經に属する四大教法」）は、三藏の正統性・權威性を保証するための理論として言及されることが定説であった。この原因は、そこに現れる「法と律」「經と律」「世尊の言葉」といった用語が、三藏を意味していると理解されたからである。しかしながら、これまで検討してきたように、これらの用語は三藏だけを意味するものではない。続いて本節ではブッダゴーサ註（DNA.）を通して、これらの用語が何を意味しているのかを子細に考察し、前節での結論が上座部における四大教法の標準的理解である点を明らかにする。

第1項 「經と律」の定義

まず、「經と律」の定義について考察する。この「經と律」とは、新たに提示された教説が「世尊の言葉」に適うか否かを判別するための判定基準である。まず、DNA. 16「大般涅槃經註」において、ブッダゴーサは「經と律」の解釈について次の五説を挙げる。

DNA. 16 (Vol. II pp. 565.29-566.30) : 「經に引き合わせて」とは、「經に引き比べて」である、「律に照らし合わせるべきです」とは、「律に照らし比べるべきである」である。【第一説】またこの場合における「經」とは律である。たとえば「【問】どこにおいて禁じられているのか。【答】サーヴァッティにおいて、經分別においてである」と説かれている。「律」とは犍度部である。たとえば「律に違越する」と説かれている。このようであれば、律藏すらも限なく取り上げられていない。【第二説】また、両分別が經であり、犍度部・附隨が律である。このようにすれば律藏は限なく取り上げられる。【第三説】あるいは、經藏が經であり、律藏が律である。このようであれば、二つの藏は取り上げられている。【第四説】あるいは、經〔藏〕と阿毘達磨藏が經であり、律藏が律である。このようにしても、三藏はまだ限なく取り上げられていない。なぜなら「經」という名を持たない“仏陀の言葉”と呼ばれるものがあるからである。たとえば、『ジャータカ』『無礙解』『義釈』『スッタニパータ』『ダンマパダ』『ウダーナ』『イティヴッタカ』『天宮事』『餓鬼事』『長老偈』『長老尼偈』『アパダーナ』である。【第五説】また、スディンナ長老は「經という名を持たない“仏陀の言葉”は存在しない」と〔主張し〕、そのすべてを限なく取り上げて「三藏が經である。そして律は手段である」と主張する。…中略…。従って、「經に」とは、「三藏たる仏語に引き合わせるべきである」であり、「律に」とは、「この貪

欲などを調伏する手段に照らし合わせるべきである」ということが、ここでの意味である。

このようにブッダゴーサは「経と律」の解釈について五説を紹介し、そのうち第五説を採用している。これをまとめれば次のようになろう。

	判定基準		ブッダゴーサによる批判
	経 (sutta)	律 (vinaya)	
第一説	経分別	犍度部	律蔵すら含み切れていない
第二説	両分別	犍度部・附随	律蔵しか含まれていない
第三説	経蔵	律蔵	二蔵しか含まれていない
第四説	経蔵・論蔵	律蔵	経と呼ばれない仏語が含まれていない
第五説	三蔵	煩惱の調伏手段	

このうち第五説の「経と律」について青野道彦〔2007：p. 43.22-25〕は、「sutta を「三蔵」として位置付けてしまったために、vinaya に配分する典籍がなくなってしまう、窮余の策として vinaya を本義である《煩惱の調伏法》として定義したと考えるべきであろう」と述べて、「「三蔵」のみを「世尊の言葉」として位置付けようと試みている」と結論している⁽¹⁹⁾。しかし、この主張が正しいのであれば「経と律＝三蔵」という等式が成立して然りであるが、実際には第五説において「経＝三蔵」「律＝煩惱の調伏手段」という定義が与えられている。よって、この「経と律」という判定基準によって導かれる「世尊の言葉」は、当然、「三蔵」とは別の範囲を指しているはずである。このように青野道彦〔2007〕の理解は受け入れ難い。

また、これと同様の主張は馬場紀寿〔2008〕においても確認されるが、やや記述に混乱が見られる。馬場紀寿〔2008：p. 166.11-13, p. 210.1-2, p. 213.13-14〕は、四大教法における仏説判定基準として「法と律」に言及しているが、正確には「経と律」と表記すべき箇所であり、「法と律」と「経と律」が混同されている。さらに馬場説では、四大教法における「法と律」が、ブッダゴーサが三蔵の範囲を定義して「全ての仏陀の言葉＝法と律＝三蔵」と等式を述べるなかでの「法と律」と同一視されている⁽²⁰⁾。すなわちこの等式によれば、新たに三蔵に組み込むべき“仏陀の言葉”は、もはや三蔵の範囲の外側に存在し得ないはずであるから、判定基準そのものが三蔵と全同であって然りであり、結果的に「三蔵＝法と律＝経と律」という関係が導かれる、ということであろう。しかしこの関係は、既に検討してきたように、四大教法に対するブッダゴーサ註から得られるものではない。

このように、両研究において共通して確認される「経と律＝三蔵」という主張は、上座部註釈文献から回収されるものではない。このことは、「経と律」の語義釈のうち第四説を、「経とは呼ばれない“仏陀の言葉”が取り上げられていない」と批判して斥けていることから確認で

きる。このブッダゴーサによる批判は、四大教法を考察する上で重要な示唆を与えている。というのも、ブッダゴーサが採用する第五説において、結局これら「経とは呼ばれない“仏陀の言葉”」が「経＝三蔵」のもとに収められてしまっている。したがって、ブッダゴーサが第四説の「経」のうちに「経とは呼ばれない“仏陀の言葉”」を含めさせて、「経と律＝三蔵」とする解釈も可能であった筈である。このような解釈を選べたのにも関わらず、第五説において「経＝三蔵」、「律＝煩惱を除く手段」と解釈することに重大な意義を認めなくてはならない。すなわち、上座部の四大教法において「三蔵＝法と律＝経と律」という関係は成り立たず、従って、「経と律」という判定基準によって導かれる「世尊の言葉」も、三蔵と同一の範囲を意味しているわけではない。

第2項 「法と律」の定義

続いて「法と律」の意味を検討する。DN. 16経によれば、仏滅後に「これが法である、これが律である」と主張する者が現れても、それを鵜呑みしてはならず、「経と律」という基準に合致するものだけが「世尊の言葉」として受け入れられる。An, Yang-Gyu [2002] は、この「世尊の言葉」として受け入れられた「法と律」が上座部三蔵を意味していると理解する。この理解が導かれた理由は、第一結集において「法と律」が合誦され、それが三蔵になったという伝承と密接に関係している⁽²¹⁾。すなわち、第一結集伝承における「法と律」と、DN. 16経の四大教法に説かれる「法と律」とを同一のものと理解することで、結集において収載された三蔵だけを「法と律」として規定することが四大教法の役割であるとするのである。確かにこのような理解は、經典と律蔵に残された字義に従う限りでは十分に可能であろう。しかしながら、ブッダゴーサを初めとする上座部註釈家たちもそのように解釈していたかは極めて疑わしい。なぜなら、ブッダゴーサもダンマパーラも、四大教法に対する註釈において「法と律＝三蔵」という関係を示していないからである⁽²²⁾。よって、第一結集における「法と律」の理解がここにも適用できるかどうかを再検討しなければならない。この問題を解く手がかりは、四大教法における判定基準「経と律」のなかの「律（＝煩惱の調伏手段）」を註釈するために引用される、AN. viii, 53経の内容である。次のように引用される。

DNA. 16 (Vol. II p. 566.7-27): また、スディンナ長老は「経という名を持たない“仏陀の言葉”は存在しない」と〔主張し〕、そのすべてを隈なく取り上げて「三蔵が経であり、そして律は手段である」と主張する。それゆえに、その手段を示して、次の経を引用した。「ゴータミーよ、もし貴女が法を⁽²³⁾理解し、その法が有貪を引き起こして、離貪を〔引き起こ〕さず、…中略…、難養性を引き起こして、易養性を〔引き起こさ〕ないのであれば、ゴータミーよ、“これは法ではない、これは律ではない、これは師の教えではない”と一向に憶持しなさい。しかしゴータミーよ、もし貴女が法を理解し、その法が離貪を引き起

こして、有貪を〔引き起こ〕さず、…中略…、易養性を引き起こして、難養性を〔引き起こさ〕ないのであれば、ゴータミーよ、“これは法である、これは律である、これは師の教えである”と一向に憶持しなさい」（AN. viii, 53経）と。

上で引用される AN. viii, 53経は、ある教法が「法と律」に適っているか否かの問題を扱っており⁽²⁴⁾、四大教法における「法と律」の意味を検討する上で重要な示唆を与えることが予想される。なお、上で引用される AN. viii, 53経では、有貪などを引き起こすものが「非法と非律」であり、離貪など解脱に資するものが「法と律」とであると説かれている。すなわち、「経に属する四大教法」における「律（＝煩惱の調伏手段）」という基準に照らし合わせて妥当であると判断された「法と律」は、謂わば「解脱に資する教え」であり、決して「三蔵」ではない。この理解は、本稿（第2節1項）において既に検討した MNA. 104経における「法と律」に対する上座部解釈と全く同一であり、ブッダゴースによる理解の一貫性が伺える。ダンマパーラも、この箇所⁽²⁵⁾の復註（DNT.）において、同じ理解をそのまま踏襲している。

DNT. 16 (Vol. II pp. 214.23-215.4): 「このように、ある教法（pariyattidhamma）が、習得・憶持・質問への作意によって如理に実践する者にとって、有貪などの状態を回避することの原因となり、離貪などの状態を引き起こせば、〔そのような教法を〕一向に“これは法である、これは律である”〔と憶持すべきである〕。まさしく悪処などに堕ちぬよう保持することゆえに〔法であり〕、諸煩惱を調伏することゆえに〔律である〕。正等覚者の教誡・忠告であるから“これは師の教えである”と憶持し、理解し、悟達するべきである」という意味である。

ここでは「法」（dhamma）については「悪処などに堕ちぬよう保持すること（dhāraṇa）」、「律」（vinaya）については「諸煩惱を調伏すること（vinayana）」という語義釈を与えているだけで、「法と律」が三蔵を意味しているとまでは解釈されていない。このような解釈はダンマパーラに限ることではない。たとえば、ブッダゴースに帰せられる VibhA. (pp. 325.18-327.4) や、ウパセーナ著 MahNA. (Vol. I pp. 145.20-147.17)、マハーナーマ著 PtsA. (Vol. II pp. 505.7-506.32) の何れにおいても、「法と律」を語義釈するために AN. viii, 53経が引用されるが、この「法と律」を三蔵に当てはめる解釈は存在しない。

従って AN. viii, 53経に説かれる「法と律」が三蔵を意味するという理解は、上座部の伝統において標準的なものではない。この AN. viii, 53経を引用して「経に属する四大教法」をブッダゴースが定義している以上、四大教法によって導き出される「法と律」が三蔵を意味しているとは認めがたい⁽²⁵⁾。

第3項 「大般涅槃經註」における四大教法の意味

このように DNA. 16「大般涅槃經註」に説かれる「經に属する四大教法」も、MNA. 108「サーマゲーマ經註」に説かれるそれと同様に、三藏の内容や範囲を規定するための理論ではない。そして、四大教法における「法と律」の定義は、DNA. と MNA. との間に高い親和性が認められる。すなわち DNA. 16「大般涅槃經註」に説かれる「經に属する四大教法」は、新たに提示された「法と律」が「解脱に資する教え」に適うか否かを、「經と律」に照らし合わせて判断する理論である。従って四大教法から導かれる「世尊の言葉」も、「三藏」ではなく「解脱に資する教え」を意味していると結論付けられる。前節までの結論も加味したうえで、本節の結論を表に纏めれば次のようになる。

DNA. 16	従來說	本稿の結論
經に属する四大教法	三藏の内容や範囲を規定する理論	新たに提示された教説が、解脱に資する教えであるか否かを判別する理論
法と律	法＝經藏・阿毘達磨藏 律＝律藏	法＝三十七菩提分法などの善法、惡趣を堕ちぬよう保つ法 律＝煩惱を調伏する手段 非法＝煩惱などの染汚法や、八覺支などの不正確な教え 非律＝煩惱を調伏しないこと
經と律	三藏	經＝三藏 律＝煩惱を調伏すること
世尊の言葉	三藏	解脱に資する教え

結論

本稿では、ブッダゴーサによる著作を中心にして、上座部における四大教法の理解を検討した。次の点が結論付けられる。

四大教法について上座部は、「經に属する四大教法」と「律に属する四大教法」の二種に分ける。このうち「經に属する四大教法」は、新たに提示された教説が、正しい仏教理解に基づいた解脱に資する教えであるか否かを判別するものである。そして「律に属する四大教法」は、律藏の条項を拡大解釈した場合の是非を判別するものである。従って四大教法は、三藏に含まれる典籍の正統性・權威性を保証する理論でも、仏説を三藏だけに限ろうとする理論でもない。この点においてブッダゴーサとダンマパーラの理解は一致している。

DN. 16「大般涅槃經」に説かれる「經に属する四大教法」は、仏滅後に新たに提示された「法と律」を、「經と律」という判定基準に照らし合わせて、それが「世尊の言葉」に適うかどうか判別する理論である。MNA. 104「サーマゲーマ經註」に説かれる記述に基づいて、これ

を理解すると次のようになる。仏滅後に一部の仏教徒が「十不善業道こそが法である」と主張した場合、判断条件である「経（＝三蔵）と律（＝煩惱の調伏手段）」に引き合わせれば、それが解脱に資する教えではないと判明するため「十不善業道は非法である」と斥けられる。逆に「十善業道」は、解脱に資する正しい教えであるため「法」として、すなわち「世尊の言葉」として受け入れられる。またある比丘が「これが正しい煩惱の調伏法である」と主張した場合、本当にそれが煩惱を防ぎ、捨断し、考察するものであるか吟味して、役立たないものであれば「非律」であると斥けられ、役立つのであれば「律」、すなわち「世尊の言葉」として受け入れられる⁽²⁶⁾。このように上座部において、四大教法によって導き出される「世尊の言葉」とは、「三蔵」を意味するのではなく、より広く「解脱に資する教え」を意味している。

従来の諸研究は、上座部における四大教法は三蔵の内容やその範囲を規定するための教理であり、そこに説かれる「法と律」「経と律」「世尊の言葉」という用語がいずれも仏説たる三蔵を意味すると理解してきた。しかしこれは正しくない。よって、馬場紀寿の指摘した「全ての仏陀の言葉＝一味＝法と律＝初・中・後＝三蔵＝五部＝九分教＝八万四千法蘊」という等式が、すべての上座部文献に適用できるわけではない。従って、聖典に残されている「仏陀の言葉」「世尊の言葉」「仏陀の所説」などの類語は、その文脈に応じて具体的な意味が吟味されなくてはならない。

ABBREVIATIONS

- AN. *Aṅguttara-Nikāya* - PTS.
 ANA. *Aṅguttaranikāya-Aṭṭhakathā (Manorathapūraṇī)* - PTS.
 ANṬ. *Aṅguttaranikāya-Ṭikā (Sāratthamañjūsā)* - PTS.
 DN. *Dīgha-Nikāya* - PTS.
 DNA. *Dīghanikāya-Aṭṭhakathā (Sumaṅgalavilāsini)* - PTS.
 DNṬ. *Dīghanikāya-Ṭikā (Līnatthappakāsanā)* - PTS.
 MahNA. *Mahāniddeśa-Aṭṭhakathā* - PTS.
 MN. *Majjhima-Nikāya* - PTS.
 MNA. *Majjhimanikāya-Aṭṭhakathā (Papañcasūdanī)* - PTS.
 MNṬ. *Majjhimanikāya-Ṭikā (Līnatthappakāsanā)* - VRI.
 Netti. *Nettipakaraṇa* - PTS.
 PTS. Pali Text Society.
 PṭsA. *Paṭisambhidāmagga-Aṭṭhakathā* - PTS.
 VibhA. *Vibhaṅga-Aṭṭhakathā (Sammohavinodanī)* - PTS.
 Vin. *Vinaya* - PTS.
 Vis. *Visuddhimagga* - PTS.
 VRI. Vipassana Research Institute - Chatṭha Saṅgāyana Tipiṭaka, based on Dhammagiri-Pāli-ganthamālā edition.

BIBLIOGRAPHY

- Anālayo, Bhikkhu [2014] *The Dawn of Abhidharma*, Hamburg: Hamburg University Press.
- An, Yang-Gyu [2002] “Canonization of the Word of the Buddha: With Reference to Mahāpadesa,” *Buddhist and Indian Studies in Honour of Professor Sodo MORI* (森祖道博士頌寿記念・論文集), Hamamatsu: Kokusai Bukkyoto Kyokai, 2002, pp. 55–67.
- Cousins, L. S. [1983] “Pali Oral Literature,” *Buddhist Studies: Ancient and modern*, London: Curzon Press, pp. 1–10.
- [2005a] “Pāli Oral Literature,” *Buddhism: Critical Concepts in Religious Studies*, London: Routledge, pp. 96–104.
- v. Hinüber, O. [1996] *A Handbook of Pāli Literature*, Berlin: Walter de Gruyter.
- Norman, K. R. [1997] *A Philological Approach to Buddhism: the Bukkyō Dendō Kyōkai lectures 1994*, London: School of Oriental & African Studies.
- 青野道彦 [2005a] 「四大教法 (cattāro mahāpadesā) の解釈の変遷——ブッダゴーサにおける転換——」, 『インド哲学仏教学研究』 12, pp. 40–52.
- [2005b] 「「四種律」 (catubbidhavinaya) の適用範囲とその意義」, 『パーリ学仏教文化学』 19, pp. 65–73.
- [2007] 「註釈家による Catumahāpadesakathā の理解——「世尊の言葉」の意味をめぐって——」, 『仏教文化研究論集』 11, pp. 40–56.
- 片山一良 [1989] 「四大教法 (Cattāro Mahāpadesā) について」, 『パーリ学仏教文化学』 2, pp. 56–68.
- 斎藤明 [2011a] 「大乘仏教とは何か」, 『シリーズ大乘仏教 1 大乘仏教とは何か』, 春秋社, pp. 3–38.
- 佐々木閑 [2011c] 「大乘仏教起源論の展望」, 『シリーズ大乘仏教 1 大乘仏教とは何か』, 春秋社, pp. 73–112.
- 清水俊史 (Shimizu, Toshifumi) [2015c] “The Doctrinal Canonization of the *Kathāvatthu*,” *Journal of Indian and Buddhist Studies*, Vol. 63, No. 3, pp. 149–155.
- 馬場紀寿 [2008] 『上座部仏教の思想形成——ブッダからブッダゴーサへ——』, 春秋社.
- 藤田祥道 [1998] 「仏語の定義をめぐる考察」, 『インド学チベット学研究』 3, pp. 1–51.
- 堀内俊郎 [2009] 『世親の大乘仏説論——『釈軌論』第四章を中心に——』, 山喜房佛書林.
- 本庄良文 [1989] 「阿毘達磨仏説論と大乘仏説論——法性, 隠没経, 密意——」, 『印度学仏教学研究』 38(1), pp. 59–64.
- [2011b] 「アビダルマ仏教と大乘仏教——仏説論を中心に——」, 『シリーズ大乘仏教 2 大乘仏教とは何か』, pp. 173–204.
- 森章司 [2000] 『初期仏教教団の運営理念と実際』, 国書刊行会.
- 森祖道 [1984] 『パーリ仏教註釈文献の研究』, 山喜房佛書林.
- 山極伸之・佐々木閑 [1997] 「サマンタパーサーディカー研究序説」, 『パーリ学仏教文化学』 10, pp. 25–35.

註

- (1) 藤田祥道 [1998 : pp. 15.13-21.25] は、北伝系の伝承において第二結集（七百結集）の際に、十事の非法が仏説に適うか否かを決定する判定基準として、四大教法が機能していたことを指摘している。
- (2) 本庄良文 [1989] ; 馬場紀寿 [2008 : pp. 209.1-210.17] を参照。
- (3) 初期仏教における聖典形成史については Cousins, L.S. [2005a] (= [1983]) を参照。大乘仏説論については本庄良文 [1989] ; 佐々木閑 [2011c] を参照。また、藤田祥道 [1998] ; 堀内俊郎 [2009 : pp. 27-99, pp. 321.22-324.8] ; 斎藤明 [2011a : pp. 15-29, p. 36 註26] は、四大教法が大乗經典の仏説・非仏説を巡る議論において用いられていることを指摘している。
- (4) 本庄良文 [1989] [2011b : pp. 187.5-188.16] を参照。また、「法性」を判定基準に認めることが新たな仏説を生み出す契機になったと指摘されている。藤田祥道 [1998] ; 馬場紀寿 [2008 : pp. 209.15-210.4] を参照。
- (5) Hinüber [1996 : p. 6 § 9] ; An, Yang-Gyu [2002 : p. 65.3-7]
- (6) DNA. 16 (Vol. II p. 567.5-16) ; DNṬ. 16 (Vol. II p. 216.6-12)
- (7) 青野道彦 [2005b : p. 68.23-24]
- (8) DNA. 16 (Vol. II p. 567.5-16)
- (9) 片山一良 [1989] ; 山極伸之・佐々木閑 [1997] ; 青野道彦 [2005a] [2005b]
- (10) 青野道彦 [2005a] [2005b] [2007] を参照。ただし賛同できない記述も多い。
- (11) すなわち、ダンマパーラにとっては、「律に属する四大教法」も「經に属する四大教法」も、ともに「三藏」を導き出すものではなく、「三藏に準拠している教説」を導き出す手立てだったことになる。
- (12) DNA. 16 (Vol. II pp. 567.34-568.1) ; DNṬ. 16 (Vol. II p. 217.5-8)
- (13) VinA. は必ずしもブッダゴーサ真作性が確実視されているわけではないが、ブッダゴーサとはほぼ同時期に著された典籍であることに疑いはない。
- (14) PTS 版は省略が著しいため VRI 版に基づいて補って訳出する。
- (15) 『クルンディー』 (*Kurundi*) は、律に関するシンハラ語アッタカターの一種として知られ、現在では散逸してしまっている。森祖道 [1984 : pp. 167-168] を参照。
- (16) ところで、この箇所 VinA. では「法」と「律」の内容として三藏の一部が当てられている。また、DN. 16 經では、四大教法によって「法と律」が導き出されると説かれている。そこでこの両者の記述を総合して「やはり四大教法によって導き出される法と律は三藏に他ならない」と単純に理解することは出来ない。本稿が繰り返し述べるように「法」「律」「經」などの語は多義語であり、ある文献における適用されている解釈を、他の文献にまで適用することは慎重にならなければならない。後に検討するように、DN. 16 經の四大教法における「法と律」は、「三藏」という意味では理解し得ない。
- (17) MNA. 104 (Vol. IV pp. 34.16-35.24)
- (18) この「經の異門」に前後して MNA. 104 (Vol. IV pp. 47.14-48.1) ; MNṬ. 104 (VRI: Vol. IV p. 31.12-17) では「律の異門」が挟まれる。既に述べているように、「經に属する四大教法」は律藏には適用できない筈であるから、ここには該当しないと考えられる。しかしこの「律の異

門」が「律に属する四大教法」に相当するとも考えにくい。「律に属する四大教法」は、適法・不適法を決定するための理論であるから、ここで問題となっている法・非法もしくは律・非律を決定することは本来できない。

- (19) 青野道彦 [2007 : p.55.7-8]
- (20) 馬場紀寿 [2008 : p. 213.6-18, p. 216.11-14, p. 218.9-12, p. 221.12-18]
- (21) Vin. (Vol. II p. 286.16-287.28)
- (22) 同じく四大教法が説かれる ANA. においてもこの箇所には註釈はない。
- (23) DNT. 16 (Vol. II p. 214.7) : 「法を」(dhamme) とは, 「教法を」(pariyattidhamme) である。
- (24) なお AN. viii, 53経の対応漢訳経は現存しない。ただし Vin. (Vol. II pp. 258.25-259.11) や『四分律』卷59 (T22. 1008a19-b01) に並行表現が見られ、上座部内だけに流布していた文献ではない。
- (25) 正確にはスディンナ長老説をブッダゴーサが引用し、それを採用している。また、DNA. 16 (Vol. II p. 566.30-37) ; DNT. 16 (Vol. II p. 215.10-12) の一節は、新たに提示された「法と律」を判定基準「経 (=三蔵)」と照らし合わせることで、「非仏語」の混入を排除して、三蔵だけを「世尊の言葉」として承認しようとする一文に読める (青野道彦 [2007 : p. 45.4-6, p. 55.6-8] を参照)。ただし、これは判定基準「経 (=三蔵)」の註釈部であることに留意すべきである。本項において検討したように判定基準「律 (=煩惱の調伏手段)」によって是とされる「法と律」 (=「世尊の言葉」) は三蔵とは違う範疇を指している以上、四大教法は三蔵を「世尊の言葉」として定めるための理論ではない。
- (26) DN. 16経では、「経」と「律」という二つの判定基準に合致したものが「世尊の言葉」として認められるとだけ説かれているので、片方の判断条件にのみ合致する場合の扱いが不明確である。ブッダゴーサもダンマパーラもこの問題について直接的に触れていない。ただしブッダゴーサ註 (DNA.) を検討する限りでは、「経」と「律」の両基準に合致するものだけ」という理解ではなく、この「経」と「律」は有機的に結び付けられて一つの判定基準として理解されていたと考えられる。たとえば「経と律」を解釈する第四説では「経=経蔵・阿毘達磨蔵」「律=律蔵」という関係を提示しているが、経蔵・阿毘達磨 (=経) に合致しつつ、律蔵 (=律) にも合致するという「法と律」は想像し難い (第一、第二、第三説も同じ)。本稿第3節1項を参照。

付記

本研究は科学研究費 (15K16622) の助成による成果である。

(しみず としふみ 佛教大学総合研究所特別研究員)